

# 巻頭言

本についての雑感

機械工学科 廣 和 樹

私がこれまでに読んできた本は、理工学関係のものや実用的なものがほとんどだったと思う。また、読みたいと思って購入したのはいいが、読まずにどこかに置いたままにしている本も数多くあり、それらのほとんどが理工学関係や実用的なものである。思えば、子供の頃から、活字よりも絵や写真が載っている図鑑などが好きだった。それが影響している。小学生の頃、誰かが「科学質問箱」という、ひみつシリーズの本を学校に持ってきて机の上に置き、その内容を語りはじめ、自分もワクワクしながら話していたことを思い出す。

ところで、理工学関係の専門書を読んでいると、その内容がわからないことがある。そのとき、人に聞くことができればそれでいいが、聞くことができない場合、インターネットで検索したり、他の専門書を読んだりして、理解に努めている。(演習問題の答えがわからず、日本語のどの専門書を見ても載っておらず、結局、洋書の中で似たような問題を見つけたことがある。) その結果、答えが得られるときもあれば、そうでないときもある。答えが得られないときは、なるべく、どこまでわかったか明確にし、記憶の片隅に残すようにしておく。(実は人に聞くときも、こうしておく方が相手にとっても自分にとっても効率がいい。) なお、専門書は、発行年が古く、何回も改訂されているものが多いと昔、教わった。実際、そのような本を読むと、詳しくてわかりやすいことが多い。ただ、そのような本は大体、分厚くて読むのに時間がかかる。一方で、要点が簡潔に書かれた本(図書館やインターネットの書評で調べられる)もあり、自分の目的に応じて使い分けている。なお、専門書などを読んでいると、必ずといっていいほど、数式が出てくる。そのため数学力は身に付けたいと今でも思っている。公式の暗記もいいが、教科書レベルでいいから導出の過程をきちんと理解しておくことも大切だと思う。

中学2年生か3年生の頃だったと思うが、友達の家遊びに行ったとき、彼のお母さんから「ぜひ読んでください。」と言われてもらった1冊の本があった。そのときは、読むタイミングを逸してしまい、何年かして、その本がふと目に留まり気になって読んだ。その本の内容は、戦争中の暗い時代に、人道的な勇気ある決断によって、多くのユダヤ難民を救った一人の日本人に関するものであった。時代の趨勢にただ流されるのではなく、自分の考えに基づいて行動する勇気の大切さを教えられた気がしている。その「人類愛に生きた将軍」という本は、現在は廃版のため入手できないが、主人公に関する本はいくつか出版されている。

以上、本に関わることを書いたが、専門書の読み方などは人それぞれ考え方があって思う。50歳を過ぎたが、子供の時に感じたあのワクワク感や、正義感は今後も失わずにいたい。